はじめに

桜美林大学におけるサービスラーニングの取り組みを振り返る

サービスラーニングセンター長　牧田 東一

2020 年度は、長引くコロナ禍のため、サービスラーニングの活動は低調となっている。受講生数は 199 名、活動時間は 4,302.6 時間であり、2019 年度の 289 名、9830.3 時間と比べても大きく減っている。この間、サービスラーニングセンターではコロナ禍の中での活動継続のためにガイドラインを作成し、それに沿って可能な学外活動を認めてきた。引受先が活動中止の場合もあり、海外プログラムのように中止になった科目も多い。むしろ、そうした中でもサービスラーニング活動が曲がりなりにも継続できたことを評価すべきであるし、様々な配慮をしながら活動をした学生さんや指導された先生方に感謝をしたい。また、こうした中で活動をされた学生さんの中からベストサービスラーナーの選考が出来たことも大きな足跡ではないかと思う。

2011 年度に発足したサービスラーニングセンターの活動も 10 年を超え、本学におけるサービスラーニングも転機を迎えつつあると感じている。そこで、本稿ではこの 10 年の本学におけるサービスラーニング活動を振り返り、現状と今後について考える機会としたい。

2011 年度にサービスラーニングセンターの開設が決まったのは、故佐藤東洋士理事長の決断による。キリスト教主義の大学としてサービスラーニングが必要であると認識されていたと聞いている。いわば、トップダウンでサービスラーニングが開始され、筆者としては白紙の状態からサービスラーニングセンターの活動を開始した。筆者の専門は国際協力であり、海外でのボランティア活動はゼミ等で経験済みであったことが、筆者がセンター長に指名された理由であろう。つまり、本学のサービスラーニングは当初の段階から、国内のみならず海外での活動も同時に行うことが定められていたのであり、それは現在まで続いている。

トップダウンでサービスラーニングセンターの設置が決められ、全学の基礎教育を担う当時の基盤教育院の中に置かれることになった。このことは、最初から大学全体としてサービスラーニングに取り組むという意思表示であった。他方で、教員の多くにとってサービスラーニングは過去に経験がなく馴染みのない教授法であり、教員に浸透するのは容易ではなかった。大学全体のサービスラーニングという観点から、筆者は米国西海岸のサービスラーニングで有名な大学の訪問を命じられ、アメリカモデルのサービスラーニングを日本の大学である本学にどう導入するかというアプローチで仕事を始めたのである。もちろん、日本でも国際基督教大学などサービスラーニングの先進大学から大いに学んだが、基本的にはアメリカの大学を目指してきたというのは今も変わらない。

アメリカのサービスラーニングと日本のサービスラーニングのカリキュラム上の一番大きな違いは、アメリカでは優れた教授法の一つとして多くの科目にサービスラーニングを導入しようとするのに対して、日本では 1 科目あるいは数科目のサービスラーニングの科目を別途作るという方法を取る点である。このアプローチの違いは、アメリカでは多くの大学でサービスラーニングが全学必修（在学中に一回はサービスラーニング科目を履修しないと卒業できない）としており、それを可能にするにはすべての学科に相当数のサービスラーニング科目が必要だからである。科目数が少ない日本では、学外活動の負担のあるサービスラーニング科目は、社会意識の高い「いい学生」だ

けが履修するという形になりがちである。本学では一定の質を維持しつつも、より多くの学生に履修できるようにするにはどうするかということを模索してきた。

当初サービスラーニングセンターが置かれていた基盤教育院のフィールド教育科目を徐々にサービスラーニングに替えていくということから始めた。１～２年生向けの基礎教育科目の中にサービスラーニングの科目を複数用意することに注力したのである。現在では、国内活動の地域サービスラーニング科目が 10 科目、海外活動の海外サービスラーニング科目が６科目設置されている。同時に、専門課程の科目においてもボランティア活動等を科目の中に取り入れている既存の科目については、一定の条件の下でサービスラーニングに認定し、さらに関心のある教員に働きかけて専門課程の科目をサービスラーニング科目にする努力を行ってきた。専門課程では、専攻演習（ゼミ）が多くサービスラーニングに認定されている。

現在の基礎教育課程と専門教育課程の二段階でのサービスラーニングというカリキュラム構成は、アメリカのカリフォルニア大学モンテレイベイ校が行っている構成であり、それをモデルとして、ここまでやってきたと言えるだろう。

これまでは、大学全体としてのサービスラーニングのカリキュラム化に向けての動きを説明してきたが、個々の科目におけるサービスラーニングの教育実践としての深まりや多様化の追求も同時に行われてきた。単にサービスラーニング科目の数を増やすのが目的ではなく、それぞれの科目や専門に応じたサービスラーニングの方法の開発がより本質的には重要である。個々の実践については、本誌にて担当教員が報告を重ねて来ており、そちらを参照していただきたい。

さて、10 年を経て、現在本学のサービスラーニングが直面している課題は大きく２つあると言える。第一は、2021 年度から始まったリベラルアーツ学群における専門課程での二つの新規のサービスラーニング科目、探究サービスラーニングと卒業サービスラーニングプロジェクトである。この２つの科目の中には複数のプログラムが置かれることとなっており、基礎サービスラーニングと同じ仕組みである。前者は３年次に専攻演習との選択必修科目であり、特定の社会問題に様々な専門の学生が取り組むことで、リベラルアーツ教育の特徴であるマルチディシプリナリーな手法による社会問題の解決を志向する科目である。後者は、同様に異なる専門の学生がグループを作って社会課題の解決に１年をかけて取り組む社会貢献型のプロジェクトである。この２つの科目が新設されたことによって、リベラルアーツ学群におけるサービスラーニングは、曲がりなりにも４年間の教育課程を縦に通したカリキュラム構造を持つことになった。健康福祉学群においても、2023 年度からの新カリキュラムにおいて、似たような構造化されたサービスラーニングの取り組みが構想されている。これらのカリキュラム化されたサービスラーニングの内実をどのように構築するのかが、第一の課題である。

第二の課題は、本学のキャンパスの拠点化（複数化）に伴い、基礎教育が共通教育ではなく学群ごとに個別実施する形になったこともあり、新宿キャンパス、東京ひなたやまキャンパスという町田キャンパスからは離れたキャンパスにおけるサービスラーニングをどのようにするのかという課題である。町田キャンパスにあるサービスラーニングセンターではカバーできないため、各学群での別個の取り組みが期待されることとなっている。

サービスラーニングセンターでは、当面第一の課題に注力しつつ、第二の課題については各学群の動きを見守ることになると思われる。